

『古代アメリカ』14, 2011, pp.29-56

<論文>

## チャビンとパラカス

### —ペルー中央高地南部及び南海岸における地域間交流—

松本雄一

(ダンバートン・オークス研究所研究員／南山大学非常勤研究員)

#### 【要旨】

ペルー南海岸の社会が形成期後期に中央高地の大センターであるチャビン・デ・ワンタルの影響を受けることでパラカス文化が生まれた、という考えは考古学者の間で長い間共有されてきた。しかし、その根拠は遺物の様式のみであり、具体的な人の動き、あるいは両地域に存在する遺跡間の関係に関しては何も論じられてこなかったといつてよい。中央高地南部の祭祀センター、カンパナユック・ルミ遺跡における近年の調査はこの問題を再考するための新たなデータをもたらし、同遺跡がチャビン・デ・ワンタルとパラカス文化の双方と密接な関係にあったことを示した。カンパナユック・ルミは、チャビン・デ・ワンタルを中心とした巡礼ネットワークの一部であり、南海岸と中央高地南部、そしてチャビン・デ・ワンタルの間の結節点であったと考えられる。

#### 【キーワード】

アンデス形成期、地域間交流、パラカス文化、チャビン・デ・ワンタル、カンパナユック・ルミ

#### 【目次】

1. はじめに
2. チャビン・デ・ワンタルとパラカス文化
  - 2-1. 研究史概略
  - 2-2. 問題の所在
3. 中央高地南部におけるチャビン及びパラカス文化の痕跡
  - 3-1. マンターロ谷
  - 3-2. ワンカベリカ地方
  - 3-3. アヤクーチョ地方
  - 3-4. まとめ
4. カンパナユック・ルミにおける地域間交流
  - 4-1. カンパナユック 1 期 (紀元前 1000-700 年)
  - 4-2. カンパナユック 2 期 (紀元前 700-500 年)

- 4-3. まとめ
- 5. 考察
  - 5-1. 中央高地南部におけるハラカス文化
  - 5-2. 南海岸におけるチャビン現象
  - 5-3. カンパナユック・ルミと南海岸
  - 5-4. 巡礼センターとしてのカンパナユック・ルミ
- 6. おわりに

## 1. はじめに

形成期後期（紀元前 800-250 年）から末期（紀元前 250-50 年）<sup>註1)</sup>にかけてペルー南海岸において栄えたバラカス文化は、その美しい土器と織物、そして特異な埋葬で広く知られている [e.g. Benson ed. 1972; Engel 1966; Tello 1959]。バラカス文化の出現に中央高地の大祭祀センターであるチャビン・デ・ワントルが関わっていたという認識は考古学者の間で広く共有されてきたが [e.g. Burger 1988; Cordy-Collins 1976; Menzel et al. 1964; Wallace 1962, 1991]、多くの場合議論の際の根拠となるものは出土コンテキストのはっきりしない盗掘された遺物であり、実証的な裏づけを欠いていた。しかし、90 年代以降に盛んになった南海岸の体系的な調査によって [e.g. DeLeonardis 1997, 2005; Isla and Reindel 2006; Reindel and Isla 2009; Reindel and Wagner eds. 2009]、バラカス文化の出現とチャビン・デ・ワントルとの関係を考察するためのデータは増加しつつあるといえる。また、筆者が行ったカンパナユック・ルミ遺跡の発掘調査は、海岸のバラカス文化がその出現期から高地の祭祀センターと関係があったことを示し、形成期後期におけるペルー南海岸と中央高地南部との交流を新たな問題点として浮かび上がらせた [松本 2009; Matsumoto 2010; Matsumoto y Cavero 2011] (図 1、

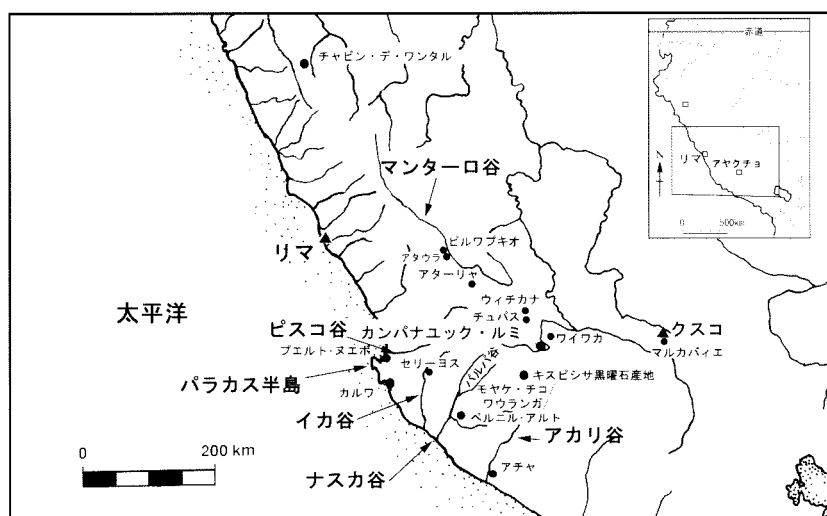


図 1 本論で扱う形成期遺跡

表 1 本論で扱う地域及び遺跡の形成期編年

東京大学調査団による編年	チャビン・デ・ワンタル	南海岸	カンバナユック・ルミ	アヤクチョ	アンダワイラス	クスコ	マンターロ谷
9							
100 cal. B.C.	形成期末期	ワラス相				カサウィルカ期	
200 cal. B.C.							
400 cal. B.C.	形成期後期		パラカス後期	パラカス後期			
450 cal. B.C.		ハナバリウ相	パラカス中期	放棄	チュバス様式		コチャチョンゴス期
500 cal. B.C.							
550 cal. B.C.			パラカス前期	カンバナユック2期	キチカバタ様式	ムユ・モココD期	
600 cal. B.C.		チャキナニ相				ビルワブキオ期	
700 cal. B.C.	形成期中期						
800 cal. B.C.		ウラバリウ相		カンバナユック1期	ウイチカナ様式		
850 cal. B.C.			ディスコ・ベルデ期 プエルト・ヌエボ期 アチャ1-2期				マルカバイエ期
900 cal. B.C.							
1000 cal. B.C.					ムユ・モココA-B期		
1100 cal. B.C.							
1200 cal. B.C.							

表 1)。本論においては、カンバナユック・ルミ遺跡の調査で得られた新たなデータをもとに、中央高地と南海岸の双方における過去の考古学的データを総合的に検討し、パラカス文化の出現とチャビン・デ・ワンタルとの関係を中央アンデスにおける地域間交流の動態の中に位置づけることを試みる。具体的には、これまで断片的に報告されてきた、南海岸及び中央高地南部の土器及び建築のデータを総合し、層位的発掘によって遺跡編年が確立しているカンバナユック・ルミ遺跡のデータを軸とした比較を行うこととする。

## 2. チャビン・デ・ワンタルとパラカス文化

### 2-1. 研究史概略

ペルー南海岸、イカ谷の周辺から出土する美しい装飾を伴った織物の存在は 19 世紀末から知られており、20 世紀初頭には古美術商による国際的な取引の対象となっていた [Paul 1991: 2-3]。しかし、科学的な考古学調査を伴う学術的な意味においては、フリーオ・C・テーヨがパラカス文化を発見したとあってよい [Daggett 1991; Tello 1959; Tello and Mejía Xesspe 1979]。テーヨとメヒア・キスベによるパラカス半島での発掘では幾重にも布でくるまれた埋葬が大量に発見され、大きな注目を集めた。一連のテーヨの調査を基礎として、その後 1950-60 年代には、文化史学派のアメリカ人考古学者を中心としてパラカス文化の編年研究が盛んに行われたのである [e.g. Menzel et al. 1964; Strong 1957]。

同時期にテーヨは、中央高地の祭祀センターであるチャビン・デ・ワンタルにおいて生まれたチャビン文化がアンデス文明の起源となったという説を提唱し [Tello 1943, 1960]、この「チャビン起源論」は 1950-60 年代のアンデス考古学界において大きな影響力を持っていた。テーヨはこの説に沿った形で、パラカス文化はチャビン文化からの派生物であると解釈したため [Tello 1959: 58]、チャビン文化の影響が南海岸に到達し、パラカス文化の成立に影響を与えた時期が重要な編年の指標とみなされた。このような初期の編年研究における最も重要な著作が、ドロシー・メンゼル、ジョン・ロウ、ローレンス・ドーソンによる、『イカ谷のパラカス土器—様式と時期に関する研究—』

[Menzel et al. 1964] であろう。彼らはパラカス文化を土器様式に基づいて 10 時期（オクカへ 1-10 期）に区分し、ナスカ文化に先行する前期ホライズン（800-100 B.C.）に位置づけた。

このメンゼル達による土器編年は、当時使用可能なデータの集成ではあったが、各時期区分の指標となるサンプルの多くは出土コンテクストのはっきりしない盗掘品であり、層位的な裏づけを欠いていた。また、絶対年代のデータが極めて乏しかったため、各時期区分の期間を考察することは不可能であった。そのため、現在に至るまで多くの考古学者によって修正案が提示されている [e.g. DeLeonardis 1997; Massey 1986; Silverman 1996; Unkel and Kromer 2009]。一方でロウはこのイカ谷の編年をアンデス全体の時期区分の指標となる基礎編年（master sequence）とみなし [Rowe 1962]、チャビン・デ・ワントルの影響がイカ谷に到達した時期から、ナスカ文化の多彩色土器が焼成後の顔料充填を伴うパラカス文化の土器に取って代わるまでを「前期ホライズン」の名でまとめた [ibid. 1962: 49]。このようなロウの命名は、発展段階的な意味を含むそれまでの時期区分を脱し、客観的な指標となる中立的な時期区分を設けることを意図したものであったが [Burger 1988: 106]、一方でパラカス文化がチャビン文化の影響によって成立したというテーヨの考えをより体系的に推し進めた例と言うこともできる。

しかし、1960-70 年代においては、南海岸における形成期を対象とした考古学的調査はあまり行われず、メンゼル、ロウ等の編年を実証的に検証するためのデータは依然として不足していた。一方でチャビン・デ・ワントルとその他地域への影響に関する研究は進展し、リチャード・バーガーは、形成期後期のハナバリウ相にチャビン・デ・ワントルに由来する宗教イデオロギーが中央アンデスの広い範囲に拡散したという説を唱えた [Burger 1988]。彼はチャビン・デ・ワントルと南海岸との間の土器様式を比較し、メンゼル達の編年の前半（オクカへ 1-4 期）のみがチャビン・デ・ワントルの影響が各地に及んでいた時期（ハナバリウ相）に対応していると論じた [ibid. 110]（表 1）。また、アリーナ・コーディー・コリンズやドワイト・ウォレスによるインディペンデンシア湾岸に位置するカルワ遺跡から盗掘された染色織物の分析 [Cordy-Collins 1976; Wallace 1991] は、南海岸の社会とチャビン・デ・ワントルの間でジャガー神などの宗教的モチーフが共有されていたことを示し、パラカス文化の初期に両者の関係が密接なものであったことを示した。さらに、1995 年から始まったマルクス・ラインデル率いるドイツ人研究者達によるバルバ谷の大規模な調査では、チャビン・デ・ワントルからの影響が強く見られるのは彼らの時期区分における前期パラカス期（Early Paracas）であり、メンゼル達の編年における（オクカへ 1-4 期）に対応することが改めて確認されている [Isla and Reindel 2006; Reindel and Isla 2009; Unkel and Kromer 2009]。

## 2-2. 問題の所在

前節で述べたとおり、パラカス文化とチャビン・デ・ワントルの関係においては、一部の図像研究を除くほぼ全ての研究がその編年上の位置づけを焦点としているといえる。また、両者の具体的な関係に関しても、その宗教的な影響が南海岸で出土した遺物の様式や図像表現に見られる、という以上の議論は展開されていない。本節ではこの点を掘り下げ、両者の関係を論じるにあたっての問題の所在を明らかにしておきたい。

第一の問題は、有効な絶対年代資料の不足であろう。南海岸の形成期遺跡においては層位的な発掘があまり行われて来なかったことに加え、中央アンデスに広くみられる形成期前期から後期にか

けての祭祀建築がほとんど確認されていないのである。近年の日本調査団の成果からも分かるとおり、精度の高い編年を確立するためには、異なる時期の建築が層位的に重なっている祭祀建築を発掘することが極めて有効であるが [e.g. Inokuchi 2010]、今までのところそのような調査に適した遺跡は見つかっていない。数少ない層位的発掘の例としてウォレスによるセリーヨス遺跡 [e.g. Wallace 1962]、リサ・デレオナルディスによる PV62D13 遺跡 [DeLeonardis 1997, 2005] の調査が挙げられるが、前者は前期バラカス期に対応する絶対年代は 2 点のみであり、そのコンテキストが明確ではない。さらに、年代測定が行われた 1960 年代は、現在に比べて測定技術に不安定さがあったことは否めない。PV62D13 に関しては、祭祀目的ではない住居的な建築であるためか、土器の装飾技法、図像の様式に関するデータに乏しく、土器の装飾的特徴に重きを置くメンゼル達の編年との対応関係を考察することは困難である。

バラカス文化全体の編年という意味では、近年のマルクス・ラインデル達による、パルパ谷の調査は極めて大きな成果をもたらしたといえる。彼らは 3 つの遺跡（ペルニル・アルト遺跡、モヤケ・チコ遺跡、フアランガ遺跡）から、40 以上の絶対年代データを得ており、バラカス文化を前期バラカス期（紀元前 800-550 / オクカへ 1-4 期）、中期バラカス期（紀元前 550-370 / オクカへ 5-7 期）、後期バラカス期（紀元前 370-200 / オクカへ 8-9 期）に分けている<sup>(註 2)</sup>。残念ながら前期バラカス期に関して有効な年代はモヤケ・チコ遺跡からの 3 点のみであり十分とはいえない。またこの遺跡は二次埋葬に使用された遺跡であり、長く居住されていた遺跡とは性質が異なるため、前期の時間幅を考える際に適切かどうかは疑問である。このような問題点に加え、多くの絶対年代データが、ハルスタット・プラトー（Hallstatt Plateau）と呼ばれる較正曲線がほぼ水平になってしまう時期に対応することも [Becker and Kromer 1993; Van der plicht 2004] 編年研究を困難にしている [松本 2009]。

もう一つの問題点は、現時点ではバラカス文化とチャビン・デ・ワンタルの関係はあくまで、遺物様式の類似性から推定されるのみであり、それ以上のことは考古学的データとしては存在しないことである。このため、大規模な祭祀建築がほとんど見つかっていないにも関わらず、中央高地や他地域でのセンター間関係を拡大解釈し、公共的な性格を持つ祭祀建築の存在を仮定した上で論が進められることが多かったといえる [Burger 1988; Garcia and Pinilla 1995]。このような状況にあっては、人の移動や物の流通の実証的な研究を行うことは極めて困難であった。さらにバラカス半島周辺とチャビン・デ・ワンタルの間の距離は 600km を超えるにもかかわらず、両者の間に存在する中央海岸や中央高地南部の祭祀センターの存在は双方の関係を論じる際にはほぼ無視されてきた。この点に関しては、チャビン・デ・ワンタル遺跡以南の中央高地全体及び南海岸での考古学調査自体が少ないためやむを得ない点もあった。しかし、筆者が 2007 年から 2008 年にかけてユリ・カペロと共にいったカンパナユック・ルミ遺跡の発掘調査において、同遺跡がその歴史を通じて南海岸とチャビン・デ・ワンタルの双方と密接な関係を有していたことが明らかとなった [Matsumoto 2010; Matsumoto y Caverro 2010]。もはや、バラカス文化とチャビン・デ・ワンタルの関係を、2 つの地域間のみの問題と考えることは不適切であり、高地と海岸部の交流を含む複雑に絡み合った地域間交流の動態として考察することが必要であるといえよう。

過去世紀以上にわたって、チャビン・デ・ワンタルをめぐる問題は、中央アンデスにおける、複雑社会、あるいは文明の発生と、その社会経済的变化を考察するための重要な焦点であり続けてきた [e.g. Burger 1988; Lumbreras 1989; Rick 2008; Tello 1943, 1960]。さらに近年では、北高地や北海

岸における形成期研究の著しい進捗によって従来の研究の見直しが進み、チャビン・デ・ワンタルの編年的位置づけ、及び同時期の他センターとの関係を問い直す試みが数多くなされている [e.g. Inokuchi 1998; Kembel and Rick 2004]。しかし、パラカス文化に関しては、遺物の様式から漠然とチャビン・デ・ワンタルからの影響が指摘されてきたのみであり、このような調査の進捗に伴う問題意識の変化からは大きく取り残されてしまっているといわざるをえない。よって本論では、チャビン・デ・ワンタルとパラカス文化の関係を、カンパナユック・ルミのデータを通じてより具体的に考察し、近年における形成期研究の文脈に位置づけることを試みてみたい。

### 3. 中央高地南部におけるチャビン・デ・ワンタル及びパラカス文化の痕跡

次章においてカンパナユック・ルミ遺跡の新たなデータを検討するが、その前に本章ではこれまで断片的に報告されてきた中央高地南部における、チャビン・デ・ワンタルの影響を受けたとされる地域、パラカス文化の痕跡が確認される遺跡のデータを総合し、カンパナユック・ルミ遺跡のデータと比較するためのまとめを作っておくことにする。

#### 3-1. マンターロ谷

ディヴィッド・ブラウマンは、1968年から69年にかけて行ったマンターロ谷の調査において、いくつかの小規模な形成期中期・後期の村落遺跡を登録し試掘を行っている [Browman 1970, 1977]。その後、ラミロ・マトスによって、類似したタイプの遺跡であるアタウラ遺跡の発掘が行われたが [Matos Mendieta 1972]、残念ながら十分なデータの提示が行われているとは言いがたい。形成期中期・後期は、ブラウマンの編年におけるビルワブキオ期、コチャチョンゴス期に対応するが、圈点文と黒色磨研の組み合わせなど、バーガーが「ハナバリウ的土器」と名付け、チャビン・デ・ワンタルの影響を示すものとみなした特徴はビルワブキオ期に集中している [Browman 1970, 1977]。パラカス的な焼成後の顔料充填を装飾技法とする土器が現れるのは次のコチャチョンゴス期であり、ブラウマンはこの時期がメンゼル達の編年におけるオクカへ 8-9 期に対応すると考えている [Browman 1977: 4]。サンプル数の少なさから両者の編年を明確に対応させることは困難であるが、規格化の進んだ階段状の文様などから、明らかに中期パラカス期（オクカへ 5-7 期）以降であることは確かであるといえよう。マンターロ谷においては、パラカス的土器は、チャビンの土器の衰退の後に現れるのであり、チャビン文化の影響を直接的な影響を示すとされる前期パラカス期（オクカへ 1-4 期）に対応する土器は確認されていない。

#### 3-2. ワンカベリカ地方

ワンカベリカ地方の形成期に関しては本格的な発掘調査はほとんど行われて来なかったといつてよい。現時点で使用可能なデータは、バーガーとマトスによるアターリヤ遺跡における表面調査のみである [Burger and Matos 2002]。アターリヤは中央高地南部においてはカンパナユック・ルミと並んで例外的な規模を有する祭祀建築であり、加工された石材を使用した基壇建築が確認されている。バーガーとマトスは、表面に散乱している土器の中に多くのハナバリウ的土器が存在することから、アターリヤが形成期後期にチャビン・デ・ワンタルの影響を受けて成立したと考えている

[*ibid.*].彼らが提示したアターリヤ遺跡の土器図版中にはバラカス文化との関わりを示すような土器は見当たらず、彼ら自身も前期バラカス期の土器とアターリヤ遺跡で採取されたハナバリウの土器の相違に驚いている [*ibid.* 184]。ただし、具体的なデータはほとんど提示されていないものの、後期バラカス期的な土器は市街に位置するパトルパンバ遺跡をはじめとしてワンカベリカ内のいくつかの遺跡で見つかっており [e.g. Ruiz Estrada 1977: Lám IX:1-2]、チャビンの土器の後にバラカス的な土器が現れるという認識は地元の歴史家、考古学者の間で共有されているといつてよい [e.g. Rubina y Barrera 2000]。

### 3-3. アヤクーチョ地方

アヤクーチョ地方においてはワマンガ市周囲の盆地部においていくつかの形成期中・後期の遺跡が確認されている。その中でもウィチカナ遺跡とチュバス遺跡では石造の基壇建築が存在することが確認されており、公共的性格を有する祭祀センターであったと考えられている [Lumbreras 1974]。土器編年もある程度確立されており [Ochatoma 1992, 1998]、3つの土器様式が形成期内の時期区分を代表する編年上の指標として設定されている。この地域の最初の土器はウィチカナ様式と呼ばれる地域色の強いもので、形成期前期から中期に対応している。先に述べたウィチカナ遺跡において最初に確認されたことでこの名で呼ばれている [Casafranca 1960]。形成期後期前半に対応する土器群はキチカバタ様式と呼ばれ、圏点文、黒色磨研などの特徴を有する [Lumbreras 1974; Ochatoma 1992, 1998]。この土器様式は、チャビン・デ・ワンタルの影響の下で成立したと考えられており、バーガーも「ハナバリウの土器」のひとつとして扱っている [Burger 私信 2010]。チュバスの出現はこの時期と対応しており、同遺跡がチャビン・デ・ワンタルの影響下に出現した可能性を示唆している。キチカバタ様式に続いて形成期後期後半に現れるのが、チュバス様式である。ルイス・ルンブレラスによれば、この様式は、「バラカスと関係のある」 [Lumbreras 1974: 78; Ochatoma 1992: 203] 土器と定義され、バラカス文化の土器に特有の焼成後の多彩色顔料の充填、及びメンゼルの編年におけるオクカへ 5-8 期に対応する装飾パターンによって特徴付けられるという<sup>143)</sup>。また、この様式の命名の由来となったチュバス遺跡を発掘したアウグスト・クルサットは、この様式が前述のキチカバタ様式より上の層位からのみ出土することを確認しており、チュバス様式は「チャビンの影響が衰退した後に現れる」 [Cruzatt 1971: 55] と述べている。バラカス文化にチャビン・デ・ワンタルの影響が及んだ時期とされる前期バラカス期（オクカへ 1-4 期）の土器はやはり確認されていない（表 1）。

### 3-4. まとめ

本章で扱った中央高地南部は、北海岸や北部高地と異なり、形成期遺跡の調査数が非常に少ないため、安易な結論を下すことは危険である。しかし、少なくともバラカス文化の痕跡が見られる地域においては一つの明確なパターンが見て取れる。上記の全ての事例においてバラカス文化の影響はチャビン・デ・ワンタルの影響を受けた土器様式と入れ換わるように現れる。つまり、南海岸でバラカス文化がチャビン・デ・ワンタルの影響を受けた時期とされる前期バラカス期（オクカへ 1-4 期）の土器は存在せず、中期バラカス期（オクカへ 5-7 期）及び後期バラカス期（オクカへ 8-9 期）の土器のみが確認されているのである。このような土器の出上パターンは、形成期後期前半、チャ

ビン・デ・ワントルの影響が中央高地や南海岸などの各地に及んだ時期には、南海岸と中央高地南部の間の交流はあまり盛んではなかったことを示唆しているのであろう。逆に、中期及び後期バラカス期の土器が高地側でも確認されていることは、チャビン・デ・ワントルの影響が衰退した後に、両者の間での地域間交流が活発化した証拠と解釈することもできる。

しかし、カンパナユック・ルミ遺跡の調査結果は、このような中央高地南部に一般的に見られるパターンとは大きく異なる関係が形成期後期の同遺跡と前期バラカス期の社会との間に存在したことを示している。

#### 4. カンパナユック・ルミにおける地域間交流

カンパナユック・ルミ遺跡は、アヤクーチョ県ビルカスワマン郡に位置する形成期中期・後期の祭祀建築であり、バラカス半島から東北東に約 240km の高地に位置している (図 1)。発掘調査の詳細にかんしては別稿においてまとめたのでここでは割愛し [松本 2009; Matsumoto 2010]、本章では南海岸及びチャビン・デ・ワントルとカンパナユック・ルミとの関係の歴史の変遷を、遺物と建築の両面から考えてみたい。

層位的な発掘と 31 点の絶対年代資料により、カンパナユック・ルミは形成期中期から後期にかけて祭祀建築として機能し、その編年は建築と土器様式の変化から 2 時期に区分できることが判明した。アヤクーチョにおける既存の編年との混乱を避けるため中立的な名称を使用し、最初の時期をカンパナユック 1 期 (紀元前 1000-700 年)、次の時期をカンパナユック 2 期 (紀元前 700-500 年)<sup>(註 4)</sup> と名付けることとした。以下で時期ごとの考察を行う。

##### 4-1. カンパナユック 1 期 (紀元前 1000-700 年)

カンパナユック 1 期の最初に、少なくとも 3 つの石造基壇と中央広場が建造される。基壇は中央の方形広場を囲むように U 字形に配置された (図 2)。絶対年代データはこの時期の建築活動が比較的短期間の間に大量の労働力をつぎ込むことで祭祀建築が造られたことを示している [Matsumoto 2010; Matsumoto y Cavero 2011]。また南基壇では、基壇内部に向かう、チャビン・デ・ワントルに見られるような回廊が発見された。土留め壁に見られる石組みには、大きな割り石の間に平石を組み込んでいく技法が用いられ、アヤクーチョの同時期の遺跡 [e.g. Lumbreras 1974: 61] とは明らかに様式が異なる。これらの特徴は総合的に見て、すべて、チャビン・デ・ワントルとの類似性を示すものであるといえよう。特に回廊に関しては、チャビン・デ・ワントルの場合でも特殊な儀礼に使用され、アクセスが限定されていた可能性が高いことを考えると [Burger 1992; Rick 2006, 2008]、カンパナユック・ルミの建築に携わった人間の中にチャビン・デ・ワントルで行われた儀礼を直接経験し、深く理解していた人物がいたことを示唆しているといえよう [Matsumoto 2010]。しかし、カンパナユック 1 期の土器様式からは、当時のチャビン・デ・ワントルのウラバリウ相の土器との類似性はほとんど読み取ることができない。カンパナユック 1 期の場合、明らかに複数の土器様式が並存しており、それぞれを中央高地南部及び南海岸に独立して存在していた土器様式と関連付けることが可能である [Matsumoto 2010] (図 3)。アンダワイラスのワイワカ遺跡のムユ・モコ C・D 期 [Grossman 1972] (図 3: f)、アカリ谷のアチャ遺跡のアチャ 2 期 [Riddell and Valdéz 1987-88;



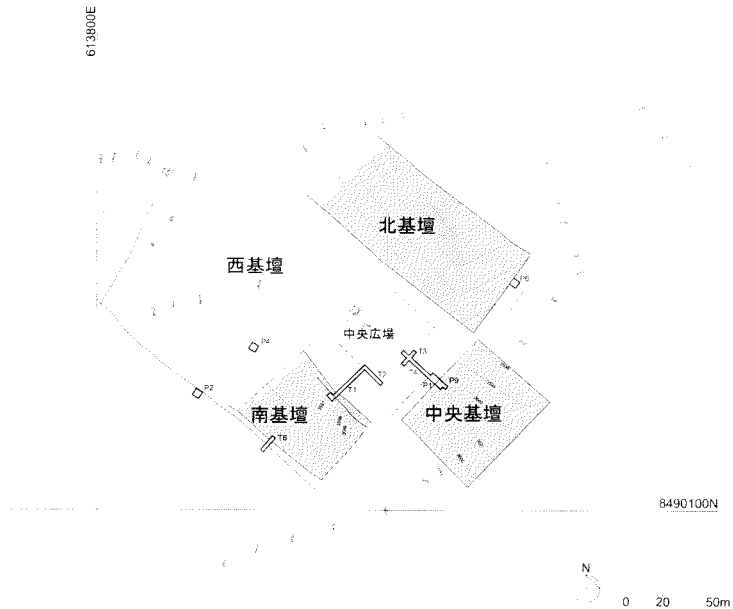


図2 カンパナユック・ルミ遺跡平面図

Robinson 1994] (図3: e, j, l; 図4)、クスコのマルカバイエ遺跡のマルカバイエ A 期 [Chavéz 1977] (図3: b, c)、マントーロ谷のヒルワプキオ期 [Browman 1970] (図3: g, h, i, k) のそれぞれの土器との関連が指摘できるが、バラカス文化とカンパナユック・ルミの関係を考える上で興味深いのはアカリ谷との関係であろう。

ここで一度、形成期中期の南海岸に目を向けてみたい。この時期の南海岸に関しては絶対年代データも乏しく、公共祭祀建築も見つかっていないが、いくつかの村落遺跡 (village / domestic site) といわれるものが確認されている。ここでは、カンパナユック 1 期と同時期であることが絶対年代の点からもある程度確認できる 2 つの遺跡に焦点を当てることにする。一つ目はバラカス半島の付け根の部分から北に 10km ほどの海岸部に位置するプエルト・ヌエボ遺跡である。フレデリック・アンジェルによって調査された [Engel 1966] この遺跡からは 2620±60 B.P. (NZ-877) と 2609 B.P. (V-899) <sup>(註5)</sup> という 2 つの形成期中期に対応する年代 (いずれも未補正) が報告されている [Paul 1991: Table 1.1]。ルベン・ガルシアとホセ・ピニーヤ [Garcia and Pinilla 1995] によれば、この時期の土器は、先行するディスコ・ベルデ期に生まれた、貼り付け高台 <sup>(註6)</sup>、ネガティブ技法とともに、多彩色の顔料を用いた焼成後の顔料充填、人面の凶像表現などの新たな要素によって特徴付けられる [ibid. 50]。彼らはまた、焼成後の顔料充填などが後のバラカス様式の上器においても主要な装飾技法として使われることから、このバラカス半島近辺のプエルト・ヌエボ期の土器が、チャビン・デ・ワンタルの影響を受けることでバラカス様式の土器が生まれたと考えている [ibid. 55]。しかし、カンパナユック 1 期の土器においては、上記のプエルト・ヌエボ期に属する特徴はほぼ見つかからないといってよい。これに対して、バラカス半島から南に 250km に位置するアカリ谷の様相は大きく異なる。まず絶対年代としては、1960 年代から断続的に行われてきたアチャ遺跡の調査によつ

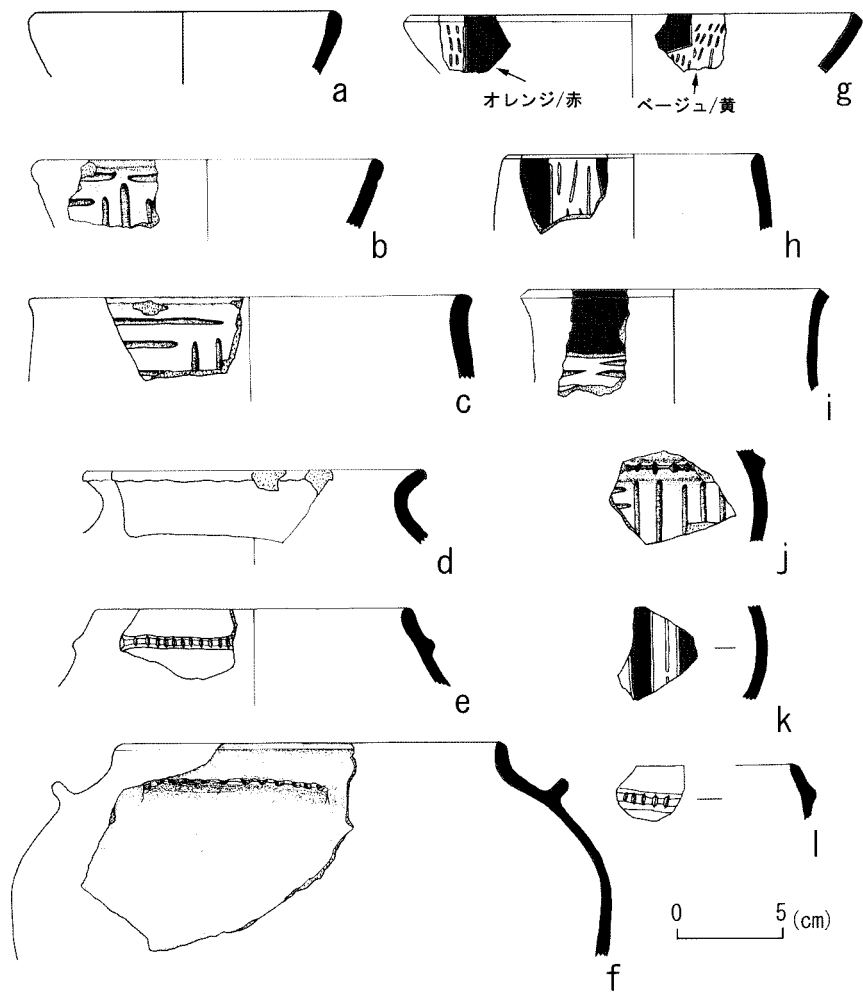


図3 カンパナユック・ルミ遺跡出土、カンパナユック1期土器

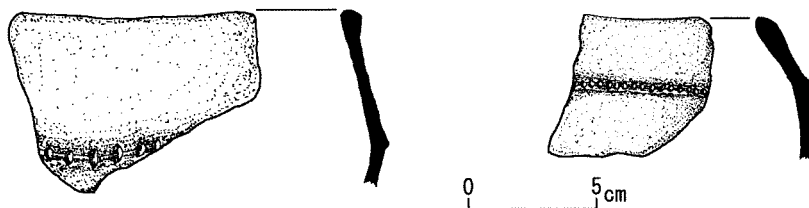


図4 アチャ遺跡出土アチャ2期土器 (Robinson 1994: Figure14 より改変)

て 3150±80 B.P.から 2590±200 B.P.までの範囲の年代（未補正）が 9 点報告されている [Robinson 1994: Figure 18]。編年はアチャ 1 期とアチャ 2 期に分かれるが、カンパナユック 1 期と土器様式の点で多くの共通点を有するのは時代が下るアチャ 2 期である。層位的な問題からその開始時期を同定することは困難だが、おそらくは絶対年代のうちで紀元前 800 年以降に対応するあたりがアチャ 1 期と 2 期の境界となるのであろう。アチャ 2 期の土器においては、貼り付け高台、ネガティブ技法はプエルト・ヌエボ期の土器と共通しているが、焼成後に多彩色の顔料を充填するという、プエルト・ヌエボ期に特徴的な装飾技法を用いた土器は出土しない。一方で、せり上がるように湾曲し上部がやや外切れ形で整形された口縁をもつ無頸壺、口縁下にひも状の貼り付け文を水平に配し刻み日や刺突文で装飾する技法など（図 4）、プエルト・ヌエボ遺跡に見られない要素も多く見受けられる。これらの特徴は、カンパナユック 1 期のほかに、アンダワイラスのムユ・モコ C・D 期 [Grossman 1972]、マルカパイエのマルカパイエ A 期 [Chavéz 1977] に見られるものであり、同時期の中央高地南部との関係を示唆している。土器様式から見る限り、形成期中期／カンパナユック 1 期のカンパナユック・ルミはバラカス半島周辺ではなく、南海岸のなかでもより南部の地域と接触があった可能性が指摘できよう。

#### 4-2. カンパナユック 2 期（紀元前 700-500 年）

カンパナユック 2 期は形成期後期に対応し、建築と土器様式の双方の点で大きな変化が見られる。U 字形基壇配置の底部に位置する中央基壇においては、基壇正面の上留め壁の上に新たな壁が付け加えられ、高さが約 3m 増加し、丁寧に整形された切り石で造られた階段が正面に設置される。また南基壇においては、カンパナユック 1 期の基壇の上に一回り小さな基壇が新たに増設され、さらに基壇全体が西側に拡張される [松本 2009; Matsumoto 2010]。土器様式に関しては、カンパナユック 1 期において見られた、中央高地南部と南海岸のアチャ谷に見られる地域色の強い土器は姿を消し、チャビン・デ・ワンタル遺跡のハナバリウ相の土器、及びメンゼル達の編年によるオクカヘ 3-4 期に対応する土器が多くを占めるようになる（図 5）。

この時期には南海岸の様相も大きく変化する。バラカス半島周辺あるいはイカ谷においては、プエルト・ヌエボ期の多彩色顔料の焼成後充填、ネガティブ技法は維持されるが、それ以前の地域的な装飾モチーフ<sup>(註7)</sup>は姿を消し、チャビン・デ・ワンタル遺跡の石彫に見られる宗教的図像表現が多く見られるようになる。同時にこの時期の土器は、他の装飾モチーフ、器型、表面調整など多くの点で、バーガーが定義した「ハナバリウの土器 [Burger 1992: 213-214]」の範疇に含まれる。

カンパナユック・ルミ遺跡の南基壇において発見された埋葬からはこの時期の南海岸に典型的な土器が出土しており、カンパナユック 1 期から 2 期への移行に前期バラカス期の人々が関わっていた可能性を示唆している。この埋葬(TM-2)はカンパナユック 1 期の南基壇内部から見つかり（図 6）、カンパナユック 2 期に新たな基壇を積み上げる際に 1 期の基壇を掘り込む形で配置されたものと考えられる。35-45 歳の男性が屈葬されており、副葬品として 3 点の完型土器を伴っていた。これらの土器に関して以下で若干詳しく見ていくことにする。1 点目は、取っ手付きの朝顔鉢であり、コップ状の胴部に大きく広がった口縁が組み合わせられている（図 7）。胴部には、正面を向いた猫科動物の顔が刻線で描かれており、唇から突き出た牙の表現などから、チャビン・デ・ワンタルの宗教的図像表現が簡略化された形で表現されたものと考えられる。また、この器型は、カンパナユック

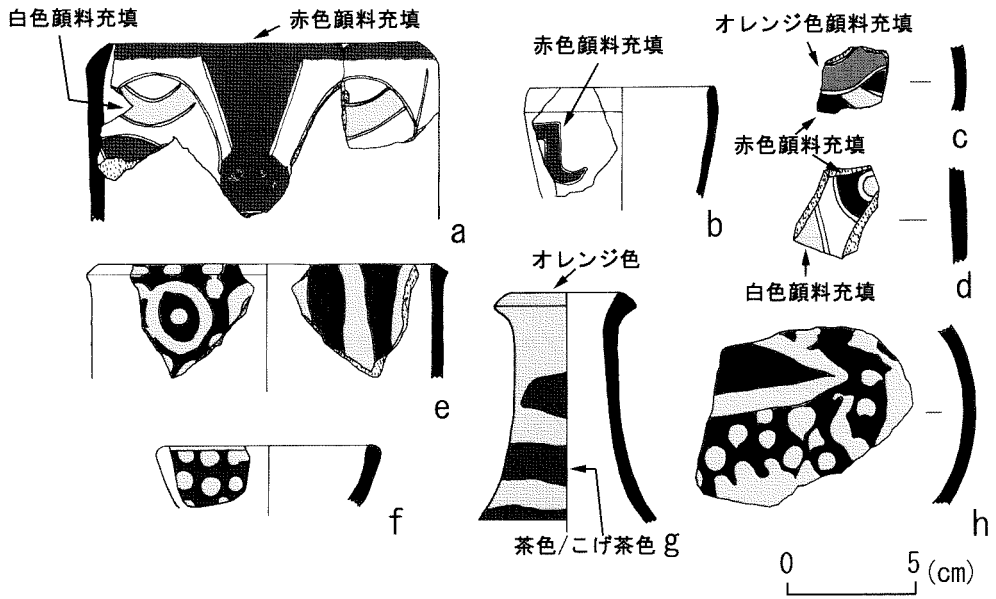


図5 カンパナユック・ルミ遺跡出土、カンパナユック2期の前期パラカスの土器 (a-d: 焼成後の顔料充填、e-h: ネガティブ技法)



図6 TM-2

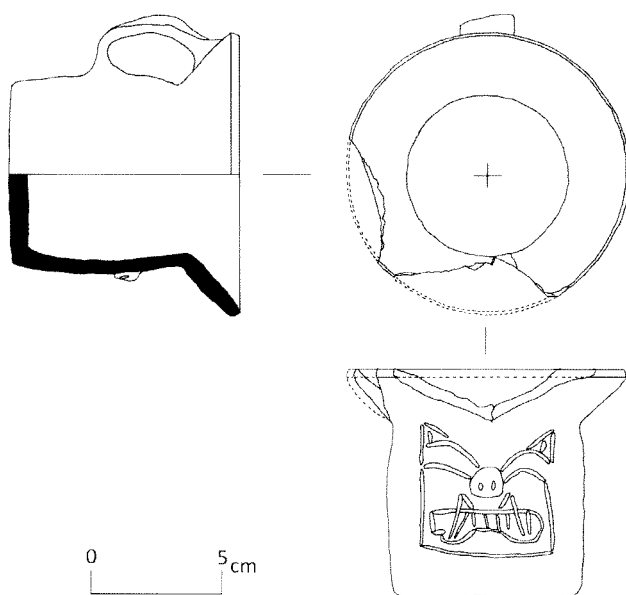


图7 TM-2 出土土器 (1)

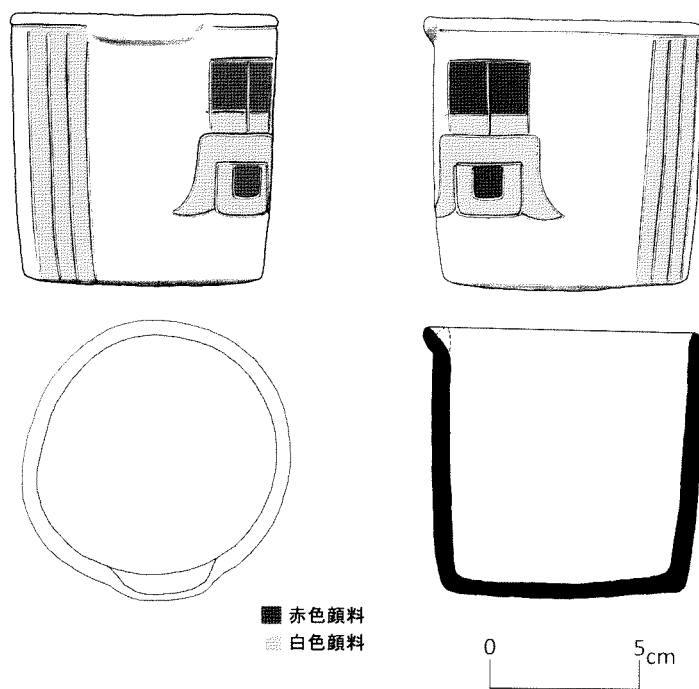


图8 TM-2 出土土器 (2)

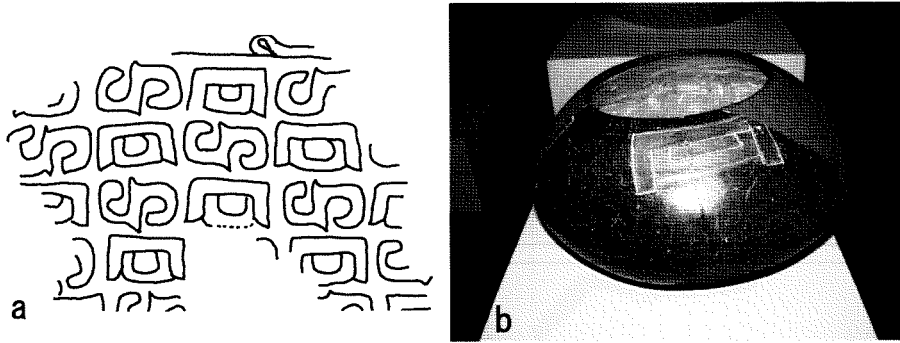


図 9 南海岸に見られる猫科動物の目の表象 (a カルワ遺跡出土染色布: Cordy-Collins 1976 Fig. 255 より改変; b オクカへ4期土器: パラカス“フーリオ C. テーヨ”博物館所蔵)

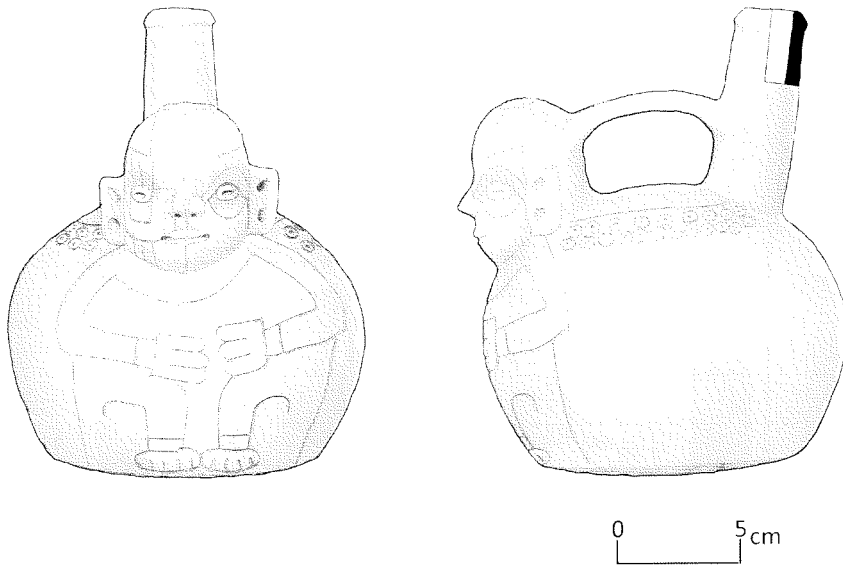


図 10 TM-2 出土土器 (3)

ク・ルミが位置する中央高地南部の土器伝統の中に存在せず、北海岸、南海岸、及び北部高地に分布している。なかでも、カルロス・エレラが報告しているネガティブ技法による装飾が施されたものは南海岸で出土したことが確実といえよう [Elera 1997: 189-191]。2点目は、注口付きのコップ型土器であり (図8)、チャビン・デ・ワンタル遺跡の石彫、特にジョン・ロウの分類におけるフェイズD、EFに対応する [Rowe 1967] 猫科動物の目が刻線で描かれており、白と赤の顔料が焼成後に充填されている。この器型も中央高地南部には見られず、カンパナユック1期にも存在しなかったものであるが、パーガーによればチャビン・デ・ワンタル遺跡に見られる典型的なハナバリウ上

器の一つであるという [Burger 私信 2010]。一方で、目のみを取り出して独立した図像表現として扱うのは南海岸に特徴的であり [Garcia and Pinilla 1995: Figure 8-A; Isla and Reindel 2006: Fig. 23]、有名なカルワ遺跡出土の染色布にも同様のモチーフが多く存在している [Cordy-Collins 1976: 79-80, 253-254] (図 9)。3 点目は、橋付き単注口ボトルであり (図 10)、胴部を胴体に見立て、座っている人物を表している。この器型はパラカス文化における典型的な器型の一つであり前期から後期を通じて存在していた [Menzel et al. 1964] が、中央高地南部では発見されておらず、この TM-2 の事例はカンパナユック・ルミ遺跡における唯一の橋付き単注口ボトルの出土例である。また、この人物の肩口にはハナバリウ的土器の一つの特徴である圏点文が 2 列にわたって配されており、注口もチャビン・デ・ワントル遺跡におけるハナバリウ相の長頸ボトル、鏡型ボトルに特徴的な形状をしている。さらに、この土器に見られる人物の表現は近年のバルバ谷におけるモヤケ・チコ遺跡の調査で出土した長頸ボトルに類例が見られる [Isla and Reindel 2006: Figure 11-h]。以上から TM-2 から出土した土器は 3 点とも、南海岸的な要素と、チャビン・デ・ワントル遺跡のハナバリウ相の土器の要素の組み合わせによって成り立っているということがいえる。このことは TM-2 の被葬者が前期パラカス期、すなわちチャビン・デ・ワントルの影響を受けた時期の南海岸に関わりの深い人物であったことを示しているのであろう。

一方でカンパナユック 1 期に見られた、アカリ谷のアチャ 2 期の要素が全く見られなくなっていることは注目に値する。ヘレイン・シルバーマンによれば、チャビン・デ・ワントルの影響は、イカ谷からインディペンデンシア湾周辺以外にはあまり見られないという [Silverman 1996: 123]。近年のバルバ谷におけるモヤケ・チコ遺跡の調査は、この範囲を南に広げたといえるが [Isla and Reindel 2006]、現時点では南海岸における前期パラカス期 (オクカへ 1-4 期) の土器の分布はパラカス半島及びイカ谷以南、ナスカ谷以北に限定されているといえる。ナスカ谷より南の地域に関してははっきりしたことは分かっていないが、地域色の強い土器伝統が継続しており、圏点文などハナバリウ的土器の要素を含むものも一部見つかってはいるが、編年上の位置づけが不明確であり、またイカ谷のオクカへ 1-4 期の土器ほどにはハナバリウ的土器との類似性が見られない [e.g. Neira y Cardona 2000-2001]。また、装飾技法としても焼成後の顔料充填、ネガティブ技法などは確認されていない。以上のことから、土器様式の点ではカンパナユック 2 期とナスカ谷より南の形成期とを関連付けることは難しい。つまり、カンパナユック 2 期は、南海岸の中でも特にイカ谷及びナスカ谷近辺の地域とのみ密接な関係があったと考えられ、1 期にあったアカリ谷との関係は 2 期には失われた可能性が高い。また、カンパナユック 2 期の土器からは、1 期に存在していたアンダワイラスやクスコなどの高地側の要素も姿を消している。これらの地域においては、形成期後期においても中期からの地域的な土器伝統が継続しており、チャビン・デ・ワントルとも前期パラカス期の社会とも関係が薄かったことが知られている [e.g. Chavez 1977; Grossman 1972; Rowe 1944]。

#### 4-3. まとめ

カンパナユック・ルミはその歴史を通じてチャビン・デ・ワントルとの関係を維持し続けたと考えられるが、南海岸との関係は時期ごとに変化している。形成期中期／カンパナユック 1 期には、アカリ谷のアチャ 2 期との間に土器様式の類似性が認められるが、パラカス半島周辺のブルト・ヌエボ期との関係性を見出すことは出来ない。これに対し、形成期後期／カンパナユック 2 期に入

ると、それまで存在したアカリ谷の土器様式との類似性は姿を消し、変わってバラカス半島及びイカ谷からナスカ谷に至る範囲に分布する前期バラカス期的土器、すなわちフェルト・ヌエボ期から続く多彩色顔料の焼成後充填、ネガティブ技法とハナバリウ的土器の器型や表面調整が組み合わせられた土器様式が出現するのである。つまり、カンパナユック 1 期には、ナスカ谷より南の地域と交流があり、イカ谷周辺の地域との接触はなかったと考えられるが、カンパナユック 2 期にはこれが逆転しイカ谷及びナスカ谷周辺の前期バラカス期の土器を有する社会との間の交流が盛んになったと考えられる。

## 5. 考察

本章では、3 章と 4 章において提示したデータを検討し、チャビン・デ・ワンタル、中央高地南部、南海岸のそれぞれの間の地域間交流の実態を把握することを試みる。まずはじめに、中央高地南部におけるバラカス文化の出現パターンをカンパナユック・ルミ遺跡と他の遺跡との間で比較し、その差異を考察する。その後、現時点で使用可能なカンパナユック・ルミ遺跡とバラカス文化のデータが、チャビン現象とどのように関わってくるかを検討してみたい。

### 5-1. 中央高地南部におけるバラカス文化

前章で提示したカンパナユック・ルミと前期バラカス期社会との関係を示すデータは、3 章でまとめたような、他の中央高地南部の遺跡におけるバラカス文化の現れ方とは大きく異なる。現在のところ、カンパナユック・ルミ以外の遺跡においてはバラカス文化の出現は形成期後期後半／中期バラカス期以降であり、チャビンのと定義される土器が衰退した後に出現するとされている。つまり、バラカス文化がチャビン・デ・ワンタルの影響を直接に受けていたと考えられる形成期後期前半／前期バラカス期の痕跡が存在しないのである。これに対してカンパナユック・ルミ遺跡においては、前期バラカス期の土器が、他のハナバリウ的土器と共にカンパナユック 2 期に現れる。そして、カンパナユック・ルミが祭祀建築としての機能を停止した形成期後期後半にはその姿を消す。したがって、カンパナユック・ルミ遺跡においては中期バラカス期に対応する土器は存在しない。ごくわずかな量の後期バラカス期に対応する土器が表層から採取されたが、これはカンパナユック・ルミが祭祀センターとしての機能を停止して数百年の後にごく短期間の居住のために使用されたときのもので考えられる。

このデータは、カンパナユック・ルミと前期バラカス期社会との関係が、中央高地南部において例外的なものであったことを示している。おそらくはイカ谷とナスカ谷の周辺に存在した前期バラカス期の社会はカンパナユック・ルミ遺跡以外の中央高地の祭祀センターとは接触を持たなかったのではないだろうか。また、カンパナユック・ルミは前期バラカス期の終了とほぼ同時に放棄され、同時に前期バラカス期社会と中央高地南部の関係も終焉を迎える。中央高地南部の諸遺跡と南海岸との交流は中期バラカス期以降に始まったのであり、そのときにはカンパナユック・ルミはすでに放棄されていた。

先にも述べたが、バラカス文化の土器編年においては、前期バラカス期がチャビン・デ・ワンタルの影響を直接に受けたとされる時期であり、中期・後期には土器様式が地域化され、チャビン・



デ・ワンタル由来と考えられる図像表現も規格化、抽象化されていく [Menzel et al. 1964]。やはり、前期パラカス期とカンパナユック 2 期を論じるためには両者とチャビン・デ・ワンタルの関係は避けては通れない。次節以降では南海岸と中央高地南部の地域間交流をチャビン現象と関連付けて考察してみたい。

## 5-2. 南海岸におけるチャビン現象

バーガーは、形成期後期においてチャビン・デ・ワンタルが汎地域的な影響力を持つ祭祀センターとなり、中央アンデスの広い範囲で階層化を含む社会変化が生じる原因となったと論じた。彼によれば、各地で一つの土器様式（ハナバリウの上器）及びチャビン・デ・ワンタル遺跡の石彫に見られるような宗教的図像表現が共有され、冶金、石材加工、上木、織物等の様々な技術革新が起こり、祭祀建築が大型化する。このような変化は、チャビン・デ・ワンタル遺跡からその宗教イデオロギー（チャビン・カルト）が拡散し、それに伴って同遺跡を中心とした遠隔地を結ぶ巡礼システムが確立したこと、またそれによって地域間交流が加速したと深く結びついている [Burger 1988, 1992, 1993, 2008]。また、ワンカベリカの辰砂 [Burger and Matos 2002]、エクアドル沿岸のスポンディルス貝、そしてキスピシサ産の黒曜石 [Burger and Glascock 2000] など、希少材の遠隔地交易もこの巡礼システムに対応する物流のネットワーク形成と対応して活発化し、アターリヤなどの特定資源の産地と密接な関わりをもつセンターの成立を促したという。カンパナユック・ルミに関しても、その成立は形成期中期にさかのぼるものの、形成期後期すなわちカンパナユック 2 期にチャビン・デ・ワンタルとの関係がより密接となり直接の人と物の行き来が活発した可能性がある [Matsumoto 2010]。キスピシサ産の黒曜石の出土量が双方において形成期後期に急激に増加したと考えられる点もこの論を支持しているといえよう [ibid.: 366-367]。上記のような、この時期の遺物に見られる汎地域的な様式の類似性と、その背後に想定される社会変化は「チャビン現象 (Chavin phenomenon)」と呼ばれ、1940 年代から現在に至るまで論争の的となっている [e.g. Burger 1992; Kembel 2008; Mesia 2007; Rick 2008; Tello 1943, 1960]。

南海岸の前期パラカス期はまさにこの時期に対応しており、チャビン現象が南海岸にまで及んだことを示すと考えられている。有名なカルワ遺跡から出土したチャビン・デ・ワンタルの宗教的図像が表現された布と、前期パラカス期に対応するハナバリウ的上器を主な根拠として両者の関係が論じられてきた [Burger 1992; Cordy-Colins 1976; Garcia and Pinilla 1995; Silverman 1996]。特にカルワ遺跡出土の染色布に関しては、その図像表現があまりにも精緻にチャビン・デ・ワンタルの宗教的図像（ライモンディ像など）を模倣していることから、チャビン・デ・ワンタルの影響を受けた重要な祭祀センターの存在が仮定されてきた。ガルシアとビニーヤは、カルワ遺跡において大量のチャビンのといわれる染色布が発見された埋葬のそばに大規模な U 字形の基壇配置を有する祭祀建築があった可能性を論じ [Garcia and Pinilla 1995: 53]、バーガーもカルワ遺跡出土の染色布の存在から、南海岸におけるチャビン・デ・ワンタル遺跡の分社 (branch oracle) の存在を想定している [Burger 1992: 195-196]。筆者は 2005 年にカルワ遺跡を訪れる機会を得たが、砂漠のただなかであり、周囲のマウンドも全て後期パラカス期の貝塚のようであった。実際にカルワ遺跡出土の染色布は方形の部屋状の埋葬から得られたものと言われており [Burger 1992: 195]、同遺跡が祭祀センターではなく墓域であった可能性を示唆しているように思える。また、近年南海岸で行われたいくつかの調査

においても対応するような大規模な祭祀建築は確認されていない [e.g. DeLeonardis 1997; Massey 1986; Reindel and Isla 2009]。唯一の例外はイカ谷中流域に位置するセリーヨス遺跡であるが、この遺跡に関しては調査者の間でも住居址か祭祀建築かという点で意見が分かれている [Splitstoser 2009; Wallace 1962]。また建築も部屋状構造を中心としたものであり、カンパナユック・ルミ遺跡やチャビン・デ・ワンタル遺跡に見られる石造の基壇建築とは大きく異なっている。また、両者と比較すると、建築自体の規模も小さいと考えられる。今のところセリーヨス遺跡を明確な祭祀建築と同定するための十分なデータは存在せず、今後の調査の進展を待つ必要があるだろう。現状における南海岸におけるデータの少なさを考慮すると軽々しく結論に至るべきではないが、筆者はここで大規模な祭祀建築が南海岸に存在しなかった可能性を指摘しておきたい。副葬品を伴う埋葬の存在 [e.g. Isla and Reindel 2006] はチャビン・デ・ワンタルの影響が社会組織の変化を促した可能性を示唆しているのかもしれない。さらに、染色布や土器様式からうかがえるように新たな技術ももたらされたのであろう。また、小規模な公共建築物も存在したかもしれない。しかし、大規模な神殿建築は行われず、漁労と農耕を生業とする住居が海岸沿いに分布するという形成期中期までの居住形態 [Silverman 1996: 109-110] が継続したのではないだろうか。

### 5-3. カンパナユック・ルミと南海岸

先に述べたとおり南海岸とチャビン・デ・ワンタルを含む高地との関係は、主に土器様式と染色布によって論じられてきた。しかし、土器様式は情報の伝播で模倣が可能であること、布に関しては湿度の高い高地では遺物として残りにくいことなどから、使用可能なデータのみから両者の相互交流を詳しく検討することは困難であった。しかし、カンパナユック・ルミ遺跡のデータは両者の関係を考察するための新たな視点を提示しているといえる。

第4章でも述べたとおり、前期バラカス期的な土器は明確にカンパナユック2期の土器複合の重要な一部であり、TM-2 出土土器に代表されるように、少なくともいくつかの土器は、南海岸から持ち込まれたものであると考えられるため、カンパナユック・ルミと南海岸との間には直接的な人の行き来があったと考えられる。これに対し、現時点ではチャビン・デ・ワンタル遺跡において前期バラカス期の土器は確認されていない。一方でカンパナユック・ルミ遺跡においては切り石の階段や回廊などの建築と、骨製品や金製品に代表される出土遺物の双方の点で、チャビン・デ・ワンタルと直接的な関係があったことが示唆されている [Matsumoto 2010]。カンパナユック・ルミは、南海岸における前期バラカス期の社会に比べてよりチャビン・デ・ワンタルと密接な関係を持っていた可能性が指摘できるだろう。一方で、前期バラカス期の土器やTM-2の存在から想定されるように、カンパナユック・ルミと前期バラカス期の南海岸との関係は、チャビン・デ・ワンタルと南海岸のものより強固であったようである。

### 5-4. 巡礼センターとしてのカンパナユック・ルミ

このような状況は、バーガーがチャビン・デ・ワンタルに由来する宗教イデオロギーの遠隔地への拡散を論じる際に用いる「分社 (branch shrine / branch oracle)」の概念 [Burger 1992: 193] を用いて解釈することが出来るように思われる。バーガーが考える分社の概念は、中央海岸の大巡礼センターであるパチャカマックにおいて16世紀に存在したと考えられる、パチャカマックを中心として

各地域の巡礼センターが2次的なセンター、あるいは分社として階層的に組織されるシステムを念頭にモデル化されている [ibid.]。このモデルにおいて分社は、ネットワークの中心であるパチャカマックの、妻、子供、兄弟として血縁上の関係と定義され双方の間に互酬の関係が成立していたという。バーガーは同様の関係が、大巡礼センターとしてのチャビン・デ・ワンタルと、遠隔地の有力なセンター群との間に成立していたと考えている。チャビン・デ・ワンタルは人・アイデア・物が行きかう広域ネットワークを形成したが、分社に相当するセンターは同様のネットワークを、各地でマイクロに展開した。彼はこのことを、分社は「より小さなチャビン・デ・ワンタル」[Burger 1992: 196] として機能した、と表現している。

仮に、カンパナユック・ルミをチャビン・デ・ワンタルの分社であり、地域的な巡礼センターであったと考えてみると、南海岸との交流がある程度説明できる。大規模な祭祀センターを中心とした社会統合が起こらなかった南海岸においては、前期パラカス期の社会はカンパナユック・ルミの巡礼システム内に組み込まれていたのではないだろうか。おそらく両者は巡礼ルートの直接的な行き来によって交流し、中央高地南部に位置していた、チュパスなど近隣の他の小規模なセンターとの交流はなかったのであろう。これが、同時期の中央高地南部のハナバリウの土器を有するセンターに前期パラカス期の土器が見当たらない理由かもしれない。

では、カンパナユック・ルミが地域的な巡礼センターとしての性格を持つならば、それが現れたのはいつなのだろうか。筆者はカンパナユック・ルミが祭祀センターとして成立した紀元前 1000 年にはすでに中央高地全体と南海岸の一部を含む地域の人と物の移動の結節点としての性格を有していたと考えている。カンパナユック 1 期においては、上記の地域の異なる範囲に分布する土器が、最初の建築フェイズに対応する層から共伴して出土する。また、これらの土器が出土する地域には、大規模な公共建築は確認されておらず、村落社会が継続したと考えられている [e.g. Chávez 1977; Grossman 1972]。このようなデータをもとに、筆者はカンパナユック・ルミ遺跡の建築活動が中央高地と南海岸の各地からきた人々による共同労働によってなされたという仮説を提示した [Matsumoto 2010: 374]。つまり、カンパナユック・ルミ遺跡はこのような大規模な祭祀建築を持たない社会の結節点であり、人々が集まる場所であったと考えたわけである。これを中央高地と南海岸からの巡礼と解釈することも可能であろう。カンパナユック 2 期にはいとチャビン・デ・ワンタルからの影響が強まり、他地域との関係が大きく変化する。4 章で述べたように、土器様式から見限りでは、1 期に存在していたクスコ、アンダワイラスなど中央高地の一部、そして南海岸のアカリ谷との交流は廃れたようである。カンパナユック・ルミが 1 期から 2 期への以降に際して接触を失ったこれらの地域は形成期後期に入っても地域的な土器伝統が継続し、明確なハナバリウの土器が存在しない地域である<sup>(註 8)</sup>。ある地域におけるハナバリウの土器の存在が、当該地域がチャビン・デ・ワンタルに由来する宗教イデオロギーを受け入れたことを示すという前提を認めるならば、このような 1 期から 2 期への変化は、チャビン・デ・ワンタルの影響が強まることでカンパナユック・ルミは、その宗教的イデオロギーを受け入れなかった地域とのつながりを失ったとも考えられる。アカリ谷に代わって、パラカス半島からナスカ谷にかけての前期パラカス期の土器を有する地域と交流するようになったことも同様に解釈できよう。カンパナユック・ルミにおけるカンパナユック 1 期から 2 期への変化と並行して、南海岸はチャビン・デ・ワンタルの影響を受けて、ブエルト・ヌエボ期から前期パラカス期への変化を経験する。この変化は、前期パラカス期の社会が

チャビン・デ・ワンタル由来の宗教イデオロギーを新たに受け入れたことを示していると考えられる。おそらくは、前期バラカス期の社会はこの時期にチャビン・デ・ワンタルの分社であるカンバナユック・ルミを中心とした巡礼ネットワークの中に組み込まれたのであろう。

もう一つ重要なのは、カンバナユック 1 期から 2 期への変化と対応して、カンバナユック・ルミの分社としての性格も変化した可能性があるということである。カンバナユック・ルミとチャビン・デ・ワンタルの双方における黒曜石の増加に加え、カンバナユック・ルミにおいて、土器様式、図像表現、儀礼の多くの点でチャビン・デ・ワンタルの模倣が行われたと考えられること〔Matsumoto 2010〕から、カンバナユック・ルミは 2 期において経済と宗教の双方の面でチャビン・デ・ワンタルとより密接な関係を構築したと考えられる。1 期における土器様式の多様性からうかがわれるような、分社といえど地域的な自律性を有する状態から変化し、よりチャビン・デ・ワンタルの、特に当時台頭しつつあった神官などのエリート層の影響下にはいり、その意向を反映するようになったのかもしれない。

## 6. おわりに

本論においては、これまでチャビン・デ・ワンタルの影響があったとのみ漠然と理解されてきた形成期後期の南海岸を、近年新たに得られたカンバナユック・ルミ遺跡の発掘データと他の中央高地南部のデータから改めて解釈することを試みた。この地域においては、海岸側でも高地側でも発掘調査に基づく調査が不足しており、現時点で結論的な考察を行うことは困難である。本論で提示した解釈は、将来的な調査のための作業仮説であることをここに明記しておきたい。特に南海岸を大規模祭祀センター不在の地域として扱ったこと、カンバナユック・ルミを他のセンター不在の地域の結節点として扱ったことに関しては、当該地域における更なる調査による検証が不可欠であろう。また、カンバナユック・ルミが放棄され、チャビン・デ・ワンタルの影響が失われた後の高地と海岸部の関係はどうなったのかに関しても別に考察する必要があるだろう。今後の両地域における調査の進展を待ちたい。

### 【謝辞】

2007 年から 2008 年にかけてのカンバナユック・ルミ遺跡の発掘調査は、Yale University Joseph Albers Fund、Coe Fund、Williams Fund によって行われた。この調査は、サン・クリストバル・デ・ワマンガ大学講師のユリ・カペロ氏及び同大学の学生の献身的な協力なしに遂行することは出来なかった。調査後の年代測定、遺物分析に際しては、National Science Foundation、松下国際財団の助成を受けた。また、本論をまとめるにあたっては、2006 年に Yale University Joseph Albers Travel Fund の助成を受けて、ペルー中央高地南部、南海岸の多くの形成期遺跡及び地方の博物館を訪れた経験が大きく影響している。イエール大学人類学部のリチャード・バーガー教授、埼玉大学教養学部の井口欣也教授、イエール大学大学院のジェイソン・ネスビット、東京大学総合研究博物館の鶴見英成研究員の各氏には多くの有益な助言をいただいた。山形大学人文学部の宮野元太郎助手には、お忙しい中図 2 を製作してくださった。また、査読者の方には建設的なコメントをいただいた。謹んで感謝申し上げます。

## 註

- (註1) 本論においては、形成期（紀元前 2500-50 年）を論じるための編年的枠組みとして、東京大学古代アンデス文明調査団によって提示された [加藤・関 1998]、早期（紀元前 2500-1800 年）、前期（紀元前 1800-1200 年）、中期（紀元前 1200-800 年）、後期（紀元前 800-250 年）、末期（紀元前 250-50 年）の区分を用いることとする。
- (註2) この編年が現状で最も信頼できるバラカス文化の時代区分であり、本論でも基本的にこの区分に準拠して論をすすめている。ただし、前述の東京大学古代アンデス文明調査団による形成期全体の編年、同時期の中央高地南部のデータを考慮して若干の変更を加え、前期バラカス期／形成期後期前半（紀元前 800-500 年）、中期バラカス期／形成期後期後半（紀元前 500-300 年）、後期バラカス期／形成期末期（紀元前 300-200 年）としておく。
- (註3) 私見では、ルンブレラスが提示している土器 [Lumbreras 1974: 79-80] は、その猫科動物の凶像表現などから、チュバス遺跡出土とされているものが、中期バラカス期／オクカへ 5-7 期に属しており、アヤクーチョ北部のワンタに位置するパチャック遺跡出土とされているもの [ibid.] が、後期バラカス期／オクカへ 8-9 期に対応するように思われる。
- (註4) 年代は補正年代とする。
- (註5) V-899 に関しては誤差範囲が報告されていない。
- (註6) 本論では ring base の訳語として「貼り付け高台」を用いることとする。
- (註7) ガルシアとピニーヤは「プエルト・ヌエボの神」という人物表象が、チャビン・デ・ワントルの影響が到達する以前の形成期中期／プエルト・ヌエボ期に特有であるとし、チャビン・デ・ワントルの影響が去った後に、後期バラカス期の土器の主要モチーフとなる「目の人物 (Oculate Being)」として現れるという仮説を提示している [Garcia and Pinilla 1995: 57]。
- (註8) セルヒオ・チャベスとカレン・チャベスは、形成期後期のクスコはチャビン文化ではなく、チチカカ湖周辺のヤヤ＝ママ宗教伝統と結びついていたと考えている [S. Chávez and K. Chávez 1976]。

## 参照文献

- Becker, B. and B. Kromer  
1993 The continental tree-ring record-absolute chronology, C14 calibration and climate change at 11 ka. *Paleogeography, Paleoclimatology, Paleoecology* 103: 67-71.
- Benson, E. P. (ed.)  
1972 *The Cult of the Feline: A Conference in Pre-Columbian Iconography, October 31st and November 1st, 1970*. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
- Browman, D. L.  
1970 *Early Peruvian Peasants: The Culture of a Central Highland Valley*. Unpublished Ph.D. dissertation,

Department of Anthropology, Harvard University.

- 1977 External relationships of the Early Horizon ceramic style from Jauja-Huancayo Basin, Junin. *El Dorado* 2: 1-23
- Burger, R. L.
- 1988 Unity and heterogeneity within the Chavín Horizon. In *Peruvian Prehistory*, edited by R. W. Keating, pp.99-144. Cambridge University Press, Cambridge.
- 1992 *Chavín and the Origins of Andean Civilization*. Thames and Hudson, New York.
- 1993 The Chavín Horizon: Stylistic chimera or socioeconomic metamorphosis? In *Latin American Horizons*, edited by Donald Rice, pp.41-82. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
- 2008 Chavín de Huántar and its sphere of influence. In *Handbook of South American Archaeology*: edited by H. Silverman and W. Isbell. Springer, New York.
- Burger, R. L. and M. D. Glascock
- 2000 Locating the Quispisisa obsidian source in the Department of Ayacucho, Peru. *Latin American Antiquity* 11(3): 258-268.
- Burger, R. L. and R. Matos
- 2002 Atalla: A center on the periphery of the Chavín Horizon. *Latin American Antiquity* 13(2): 153-177.
- Casafranca, J.
- 1960 Los nuevos sitios arqueológicos Chavinoides en el Departamento de Ayacucho. In *Antiguo Perú: Espacio y Tiempo*, edited by R. Matos Mendieta, pp 325-334. Librería Editoria Juan Mejía Baca, Lima.
- Chávez, K. L. Mohr
- 1977 *Marecavalle: The Ceramics from an Early Horizon Site in the Valley of Cuzco, Peru, and Implications for South Highland Socio-economic Interaction*. Ph.D Dissertation, University of Pennsylvania. University Microfilms, Ann Arbor
- Chávez, S and K. L. Mohr Chávez
- 1976 Carved stela from Taraco, Puno, Peru and the definition of an early style of stone sculpture from the Altiplano of Peru and Bolivia. *Nawpa Pacha* 13: 45-83.
- Cordy-Collins, A.
- 1976 *An Iconographic Study of Chavín Textiles from the South Coast of Peru: The Discovery of a Pre-Columbian Catechism*. Ph.D. dissertation, University of California, Los Angeles. University Microfilms, Ann Arbor.
- Cruzatt, V. A.
- 1971 Horizonte Temprano en el valle de Ayacucho. *Anales Científicos* 1:603-631. Universidad Nacional del Centro, Huancayo.
- Daggett, R.
- 1991 Paracas: discovery and controversy. In *Paracas Art and Architecture. Object and Context in South Coastal Peru*. edited by A. Paul, pp. 35-60. University of Iowa Press, Iowa.

DeLeonardis, L.

1997 *Paracas Settlement in Callango. Lower Ica Valley, First Millennium, B.C.* Ph.D. Dissertation, the Catholic University of America, University Microfilms, Ann Arbor.

2005 Early Paracas cultural contexts: New evidence from Callango. *Andean Past* 7: 27-55.

Engel, F.

1966 *Paracas: Cien Siglos de Cultura Peruana*. Editorial Juan Mejia Baca, Lima.

Elera, C.

1997 Cupisnique y Salinar: algunas reflexiones preliminares. In *Archaeologica peruana 2: Arquitectura y civilización en los Andes prehispánicos; Prehispanic architecture and civilization in the Andes*, edited by E. Bonnier and H. Bischof, pp. 177-201. Sociedad arqueológica peruano-alemana - Reiss-Museum, Mannheim.

García, R. S. and J. B., Pinilla

1995 Aproximación a una secuencia de fases con cerámica temprana de la región Paracas. *Journal of the Steward Anthropological Society* 23: 43-81.

Grossman, J. W.

1972 *Early Ceramic Cultures of Andahuaylas, Aprimac, Peru*. Unpublished Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.

Inokuchi, K.

1998 La cerámica de Kuntur Wasi y el problema Chavin. *Boletín de Arqueología PUCP*2: 161-180.

2010 La arquitectura de Kuntur Wasi: secuencia constructiva y cronología de un centro ceremonial del Periodo Formativo. *Boletín de Arqueología PUCP*12: 219-248.

Isla, J. and M. Reindel

2006 Una tumba Paracas temprano en Mollake Chico, valle de Palpa, costa sur del Perú/ Ein grab der frühen Paracas-Zeit in Mollake Chico, Palpa-Tal, südküste Perus. *Zeitschrift für Archäologie Außereuropäischer Kulturen* 1: 153-181.

加藤泰建・関雄二（編）

1998 『文明の創造力ー古代アンデスの神殿と社会ー』 角川書店, 東京.

Kembel, S. R.

2008 The architecture at the monumental center of Chavín de Huántar: Sequence, transformations, and chronology. In *Chavín: Art, Architecture and Culture*, edited by W. Conklin and J. Quilter, pp. 35-81. Cotsen Institute of Archaeology Monographs Contributions in Field Research and Current Issues in Archaeological Method and Theory 61, Cotsen Institute of Archaeology at UCLA, Los Angeles.

Kembel, S. R and J. W. Rick

2004 Building Authority at Chavín de Huántar. In *Andean Archaeology*, edited by H. Silverman, pp 51-75. Blackwell Publishing, Malden.

Lumbreras, L. G.

1974 *Las Fundaciones de Huamanga. Hacia una Prehistoria de Ayacucho*. Editorial Nueva Educación,

- Lima.
- 1989 *Chavín de Huántar en el Nacimiento de la Civilización Andina*. Instituto Andino de Estudios Arqueológicos, Lima.
- Massey, S.
- 1986 *Sociopolitical Change in the Upper Ica Valley, B.C. 400 to 400 A.D.: Regional States on the South Coast of Peru*. Ph.D. Dissertation, University of California, Los Angeles. University Microfilms, Ann Arbor.
- Matos Mendieta, R.
- 1972 Ataura: un centro Chavín del valle de Mantaro. *Revista del Museo Nacional* 38: 93-108.
- Matsumoto, Y. (松本雄一)
- 2009 「カンパナユック・ルミとチャビン問題ーチャビン相互作用圏の周縁からの視点ー」『古代アメリカ』第12号 pp. 65-94.
- 2010 *The Prehistoric Ceremonial Center of Campanayuc Rumi: Interregional Interactions in the Peruvian South-central Highlands*. Ph. D Dissertation, Yale University.
- Matsumoto, Y and Y Cavero Palomino
- 2010 Una aproximación cronológica del centro ceremonial de Campanayuc Rumi, Ayacucho. *Boletín de Arqueología PUCP* 13: 323-346.
- Menzel, D., J. H. Rowe, and L. E. Dawson
- 1964 *The Paracas Pottery of Ica: A Study in Style and Time*. University of California Publications in American Archaeology and Ethnology 50. University of California Press, Berkeley.
- Mesía, C.
- 2007 *Intersite Spatial Organization at Chavín de Huántar during the Andean Formative: Three Dimensional Modeling, Stratigraphy and Ceramics*. Ph. D Dissertation, Stanford University, University Microfilms, Ann Arbor.
- Neira, M and A. Cardona
- 2000-2001 El Periodo Formativo en el área de Arequipa. In *Andes 3: Boletín de la Mison Arqueológica Andina*, edited by M. Ziolkowski and A. Belan, pp. 27-60. Universidad de Varsovia, Varsovia.
- Ochatoma, J.
- 1992 Acerca del Formativo en Ayacucho. In *Estudios de Arqueología Peruana*, edited by D. Bonavia, pp. 193-213. FOMCIENCIAS, Lima.
- 1998 El período formativo en Ayacucho; balances y perspectivas. *Boletín de Arqueología PUCP* 1: 79-114.
- Paul, A.
- 1991 Paracas: an ancient cultural tradition on the south coast of Peru. In *Paracas Art and Architecture. Object and Context in South Coastal Peru*, edited by A. Paul, pp. 1-34. University of Iowa Press, Iowa.
- Reindel, M and J. Isla
- 2009 Evidencias de culturas tempranas en el valle de Palpa, costa sur del Peru. *Boletín de Arqueología*



*PUCP* 10: 237-283.

Reindel, M. and G. Wagner (eds.)

2009 *New Technology for Archaeology: Multidisciplinary Investigations in Palpa and Nasca*. Springer, Heidelberg.

Rick, J. W.

2006 Chavín de Huántar: Evidence for an evolved shamanism. In *Mesas and Cosmologies in the Central Andes*, edited by D. Sharon, pp. 101-112. San Diego Museum Papers 44. San Diego Museum of Man, San Diego.

2008 Context, construction, and ritual in the development of authority at Chavín de Huántar. In *Chavín: Art, Architecture and Culture*, edited by W. Conklin and J. Quilter, pp. 3-34. Cotsen Institute of Archaeology Monographs Contributions in Field Research and Current Issues in Archaeological Method and Theory 61, Cotsen Institute of Archaeology at UCLA, Los Angeles.

Robinson, R. W.

1994 Recent excavations at Hacha in the Acari valley, Peru. *Andean Past* 4: 9-37.

Rowe, J. H.

1944 *An Introduction to the Archaeology of Cuzco*. Paper of the Peabody Museum of American Antiquity and Ethnology 27 (2). Harvard University, Cambridge.

1962 Stages and periods in archaeological interpretation. *Southwestern Journal of Anthropology* 18 (1): 40-54.

Rubina, A. and J. Barreda

2000 *Atlas del departamento de Huancavelica*. Buenaventura y Centro de Estudios y Promoción del Desarrollo-DESCO, Lima.

Ruiz Estrada, M. A.

1977 Arqueología de la Ciudad de *Huancavelica*. SAGSA, Lima.

Silverman, H.

1996 The Formative Period on the south coast of Peru: A critical review. *Journal of World Prehistory* 10 (2): 95-146.

Splitstoser, J. C.

2009 *Weaving the Structure of the Cosmos: Cloth, Agency, and Worldview at Cloth, Agency, and Worldview at Cerrillos, an Early Paracas Site in the Ica Valley, Peru*. Ph.D Dissertation, The Catholic University of America, University Microfilms, Ann Arbor.

Strong, W. D.

1957 *Paracas, Nazca, and Tiahuanacoid Cultural Relationships in South Coastal Peru*. Memories of the Society for American Archaeology 13. Society for American Archaeology, Salt Lake City.

Tello, J. C.

1943 Discovery of the Chavín culture in Peru. *American Antiquity* 6: 135-160.

1959 *Paracas: Primera Parte*. Empresa Grafica T. Scheuch, Lima.

1960 *Chavín: Cultura Matriz de la Civilización Andina*. Imprenta de la Universidad San Marcos, Lima.

Tello, J. C. and T. Mejía Xessepe

- 1979 *Paracas Segunda Parte: Cavernas y Necrópolis*. Publicación Antropológica del Archivo "Julio C. Tello". UNMSM and the Institute of Andean Studies, New York.

Unkel, I. and B. Kromer

- 2009 The clock in the corn cob - on the development of a chronology of the Paracas and Nasca period based on radiocarbon. In *New Technologies for Archaeology: Multidisciplinary Investigations in Palpa and Nasca, Peru*, edited by M. Reindel, G. Wagner, pp. 231-244. Springer, Heidelberg.

Van der Plicht, J.

- 2004 Radiocarbon, the Calibration Curve and Scythian Chronology. In *Impact of the Environment on Human Migration in Eurasia: Proceedings of the Nato Advanced Research Workshop, Held in St. Petersburg, 15-18 November 20*, edited by E. M. Scott, A. Y. Alekseev, and G. Zaitseva, pp. 45-61. Springer, New York.

Wallace, D. T.

- 1962 Cerrillos, an early Paracas site in Ica, Peru. *American Antiquity* 27(3): 303-314.
- 1991 A technical and iconographic analysis of Carhua painted textiles. In *Paracas: Art and Architecture*, edited by A. Paul, pp. 61-109. University of Iowa Press, Iowa City.

## Chavín and Paracas: interregional interactions between the Peruvian south-central highlands and south coast

Yuichi Matsumoto (Dumbarton Oaks / Nanzan University)

Key words: Andean Formative, interregional interaction, Paracas culture, Chavín de Huántar, Campanayuc Rumi

The relationship between Chavín de Huántar and the Paracas culture has been discussed by many archaeologists for more than half a century. Although scholars agree that Chavín de Huántar played an important role in the emergence of Paracas culture, the nature of interaction between them has not been discussed due to a scarcity of archaeological data. In addition to systematic surveys carried out in the last ten years along the south coast, stratigraphic excavations at Campanayuc Rumi in Vilcashuaman, Ayacucho enabled a reconsideration of the interactions between the south-central highlands, south coast, and Chavín de Huántar.

Reevaluation of the evidence of the Paracas culture in the south-central highland demonstrate that all Paracas-related materials pertain to the Middle and Late Paracas Phases and that no evidence of the Early Paracas Phase has been found. Since the influence of Chavín de Huántar was represented in the early Paracas phase, this pattern suggests that interactions between the south-central highlands and south coast became intensive following the influence of Chavín de Huántar.

However, the new data from Campanayuc Rumi show different patterns. Campanayuc Rumi appeared as a large scale civic-ceremonial center under the religious influence from Chavín de Huántar around 1000 cal. B.C. in the beginning of the Campanayuc 1 Phase/ the Middle Formative Period (1000-700 cal. B.C.). In this phase Campanayuc Rumi was part of an interaction sphere that included the highland regions of Andahuaylas, Cuzco, and the Mantaro drainage in addition to the Acari valley of the south coast. In the subsequent Campanayuc 2 Phase/ the Late Formative Period (700-500 cal. B.C.), as the influence from Chavín de Huántar became stronger, the interactions between Campanayuc Rumi and the early Paracas culture of the south coast was intensified. A burial found in the south platform of Campanayuc Rumi (TM-2) is representative and was associated with three complete vessels that show close stylistic affiliation to the early Paracas culture as well as the Janabariu Phase at Chavín de Huántar. Since this burial was placed in accordance with the construction activities of the Campanayuc 2 Phase, it may imply that the people from the

south coast participated in construction activities of the new platforms during the Campanayuc 2 Phase.

These contrastive patterns between Campanayuc Rumi and other sites in the south central highlands suggest that the relationship between Campanayuc Rumi and the early Paracas culture of the south coast was unique and that the early Paracas people did not have contact with other contemporary centers in the highlands.

While no Early Paracas materials have been found at Chavín de Huántar, Campanayuc Rumi maintained direct contacts with Chavín de Huántar. In this case, it is probable that Campanayuc Rumi functioned to connect the south coast and Chavín de Huántar as a branch oracle of the Chavín cult. Since recent systematic surveys in the south coast seem to demonstrate that no large scale public architecture of the early Paracas culture existed in the region, Campanayuc Rumi could also have worked as a regional pilgrimage center for the people of the south coast who did not have ceremonial centers in the region.

原稿受領日 2011年3月3日  
原稿採択決定日 2011年8月3日